発刊150号
特別企画

鉄道写真家
中井 精也 さん

スペシャルインタビュー Vol.9

「ゆる鉄」だから見えてくる、暮らしの風景

中井精也さんが、鉄道写真に興味を持ったのは小学6年の時。お父さんからもらった1台のカメラが鉄道写真家へ導きました。日本はもちろん、世界中の鉄道を見てきた中井精也さんに、鉄道の魅力とその役割について語ってもらいました。

青春時代を「鉄研」に捧げる

小学6年の時、父から一眼レフカメラをもらいました。父は税理士の傍ら写真店をやっていて、ハイアマチュアだったと思います。主にスナップ写真を撮っていて、お気に入りの写真を写真専門雑誌の『朝日カメラ』や『日本カメラ』のコンテストに応募していました。

僕は、もらったカメラで何を撮ろうかと考えました。当時はスーパーカーブームだったし、好きな虫も被写体になったし、興味本位にいろいろな被写体を追いかけましたが、最終的に残ったのが鉄道でした。中学1年の時に鉄道研究部に入部。いわゆる「鉄研」と呼ばれる鉄道マニアの集まりです。

入部試験の時、部長が時刻表を開けて「この駅名、読めるか?」と。それは新潟県にある糸魚川駅でした。その時、知らない町がこんなにたくさんあるんだと気づきワクワクしましたね。それからは、授業中に隠れて時刻表を読んでいました。結局、大学3年までずーっと鉄研に所属し、鉄分の濃い青春を過ごしました。

「ゆる鉄」の第一人者として

鉄研では、○○線という路線をみんなで調べることが多く、実際に鉄道に乗り、駅間を歩きながら鉄道写真を撮っていました。

1984年当時の南リアス線 盛駅(撮影:中井 精也さん)

中学2年の時に彼女ができました。彼女に、電車がアップで写っている写真を見せると、「中井君は、電車が好きなんだね」と、ちょっと引かれました。でも、お花畑の中を走る電車とか、自然の風景の中を走る電車の写真を見せると「私も、行ってみたい!」「きれい、可愛い」という言葉が返ってきて、写真に興味を持ってくれました。子ども心に「これだな!」と思いましたよ。

まるで下心しかないように聞こえますが、彼女は鉄道に興味がない人の代表です。鉄道に興味のない人に大好きな鉄道の魅力を伝える表現方法に気づかされ、同時に、それは僕自身が撮りたいと思っていた表現方法だったので、すごくハッピーな気持ちになりました。

デジタルカメラ時代になり、ライトなカメラ愛好家が増え、裾野が広がっています。休日には、旅行を兼ねて鉄道を撮る人も増えていますね。もちろん、「乗り鉄」や「音鉄」と呼ばれる人もいますが、僕のような作風は「ゆる鉄」という一つのジャンルとして認められました。

「ゆる鉄」の鉄則は、旅情気分を楽しむこと

「ゆる鉄」の鉄則は、食べたいものを食べるように、見せたいものを撮ることです。

僕の写真を見られた人が、ほっこりするような優しい気持ちになってもらえるよう、いつも写真の力を信じています。簡単に言えば、僕自身が素敵だなという気持ちを忘れずに、フレームに収めています。

伝えたいのは、旅情とか、ローカル線に乗っている時に感じるゆるい雰囲気ですね。旅情や雰囲気など、心に響く感情は目の前に見えません。それを、どのように描写するのか。どのように感じてもらうようにするのか、その駆け引きが「ゆる鉄」の醍醐味です。

鉄道写真を撮って世界を旅すると、明らかに日本では鉄道が暮らしの中に根づいていると感じます。アメリカでは、単に輸送システムですからね。「こいつ、なんで電車なんか、撮ってるの?」という視線を感じます。

日本人の鉄道に対する愛着は特別です。旅情や郷愁を感じるDNAが強いと思います。歌でも、映画でも、鉄道が舞台になっている作品が多いのも日本らしい感情だと思います。

鉄道は、地域住民の誇り

例えば、熊本と鹿児島を結ぶ「肥薩おれんじ鉄道」には、地元の食材を使った料理やスイーツを味わえる「おれんじ食堂」という観光列車が走っています。

岩手県沿岸部を南北に走る三陸鉄道も、NHKの連続テレビ小説『あまちゃん』の舞台になり、観光客が今も押し寄せています。

3月23日には、JR山田線が一部移管され、久慈駅から盛駅が乗り換えなしでつながりました。実は、高校2年の時、日本初の第三セクターの三陸鉄道を研究テーマにしたので、1984年の開業式を撮影しました。

東日本大震災後、2014年の全通の開業式も撮影しました。その時の光景は忘れることができません。沿線の住民たちが、泣きながら花を飾ったり旗を振ったりしていました。鉄道って当たり前ですが、人を運び暮らしを支えていると、改めて実感できました。だから、三陸鉄道には強い思い入れがありますね。今年の春、岩手県沿岸部の人々の120年を超える願いが実現したことは、鉄道ファンとして非常に嬉しく思っています。

1984年当時の南リアス線 釜石駅付近(撮影:中井 精也さん)

Seiya Nakai

鉄道写真家。1967年、東京生まれ。鉄道の車両だけにこだわらず、鉄道にかかわるすべてのものを被写体として独自の視点で鉄道を撮影し、「1日1鉄!」や「ゆる鉄」など新しい鉄道写真のジャンルを生み出した。広告、雑誌写真の撮影のほか、講演やテレビ出演など幅広く活動している。著書・写真集に「1日1鉄!」「デジタル一眼レフカメラと写真の教科書」「DREAM TRAIN」(インプレス)、「ゆる鉄」(クレオ)などがある。